

主 題：光の子らしく歩みなさい
 聖書箇所：エペソ人への手紙 5章8節

近藤牧師から=今日の第一礼拝は幸田泰信兄のメッセージです。浜寺の教会の歴史の中で、もう60年を迎えようとしていますが、恐らく、手話によるメッセージはなかったのではないかと思います。私たちは今日、この日を迎えて神に感謝しなければいけません。というのは、神はこのようにろう者も聴者も関係なく、神の恵みによって救われた者たちがともに集って神を礼拝するだけでなく、ともに神によって鍛えられて、主に仕える者として遣わされて行く、そのようなことを今私たちはこの教会にあって神によって見せていただいています。この日本の中でデフの方々が学べる神学校がないという現実、しかし、神はその壁、垣根を取り払ってくださって、私たちのこの群れの中であってこの神学校ですばらしい通訳者を与えてくださって、この働きが為されるようになりました。ですから、これはだれかを誉めるのではなく、このようなすべての働きをされた神を誉め称える機会だと思います。そこで、第一礼拝と第二礼拝でメッセンジャーが変わりますが（第二礼拝は湊崎純兄）、この二人のメッセンジャーが神の前に祈りながら、遅くまで一生懸命勉強しながら準備してきた神が与えてくださったみことばを、私たちは期待をもって聞きたいと思います。

今、桜が咲き始めていますが、外はまだ寒いです。春になると草木や花々、昆虫、また、人間までもが生き生きして来る、そのような時です。桜のシーズンになると入学式や入社式がある新しい時期です。私も5年前、この教会の神学校に入るためこの場所に来ました。ここに入るときに驚いたことがあります。私には不安がありました。一部の方を除いてほとんどの方は私の知らない方々でした。それによってこれからどうなっていくのだろうと考えて不安があったのです。授業が始まった頃、岡田先生から神は見えない方ですということをお教えされました。私はそのとき、神に対して強い印象をもったことを覚えています。私は幼い頃から、神のことやキリストのことをよく聞いていました。繰り返して聞いて来ました。確かに分かっていたのに、その実、神のことをまったく知りませんでした。神はどのようなお方なのかということ、ゼロからまた学び始めました。イエスの弟子のヨハネ、彼は手紙を書きました。

Iヨハネ1：5には「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。」とあります。また、ヘブル人への手紙1：3には「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」とあります。父なる神もイエス・キリストも同じ光です。そして、私たちはそのような方であると想像することもできないようなすばらしい栄光の方を、私たちは信じ受け入れました。そのような者には神は神の子どもとさせていただきます。ヨハネはその福音書1：12で「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」と記しました。神の子どもとされた私たちは「光の子ども」と呼ばれます。悔い改めて神を信じたクリスチャンは神にふさわしい生き方が求められます。パウロは「光の子どもらしく歩みなさい。」と命じています。エペソ5：8を見てください。そこにはこのように記されています。「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」では、「光の子ども」とはだれでしょう？また、どのようにして「光の子ども」らしく歩むことができるのでしょうか？そして、歩んだ結果がどのようなものなのか、このことについて私たちは見て行きます。これらを通して私たちが「光の子ども」であること、また、それにふさわしい歩みをし、神が求めておられる生き方をしっかり学び、実践して行きたいと思います。

☆光の子らしく歩みなさい

1. 「光の子ども」とはだれでしょう？

(1) 過去、暗闇に生きていた者

なぜ、パウロはそのように「光の子ども」として生きて行くことを求めたのでしょうか？パウロは「あなたがたは、以前は暗やみでした」とはっきり言っています。私たちの以前の生活は暗闇でした。環境が暗闇だったというのではなく、あなた自身が暗闇そのものだったということです。確かに、私たちは過去、暗闇の中を生きて来ました。救われる前、私たちは罪に支配され、神から遠く離れた生き方をしていたのです。エペソ4：18に書かれている通りです。「彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。」、エペソ5：8では「以前は暗やみでした」と言っているパウロは、暗闇の生き方についてエペソ5：3-7でこのように説明しています。「あ

あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、不品行も、どんな汚れも、またむさぼりも、口にすることさえいけません。：4 また、みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。むしろ、感謝しなさい。：5 あなたがたがよく見て知っているとおりに、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者——これが偶像礼拝者です。——こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。：6 むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。：7 ですから、彼らの仲間になってはいけません。」と。「不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者」「みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談」などは悪に満ちた生き方であり、その生き方は「偶像礼拝者」だと言うのです。コロサイ 3：5にも同じことが書かれています。「ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。」「不品行な者」とは男女関係において行ないの悪い者のことで、「汚れた者」とは不潔な者、「むさぼる者」は欲深く物を欲しがるという意味です。性的乱れは当時の社会では当たり前のことでした。エペソ 4：19「道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。」、1テサロニケ 4：5「神を知らない異邦人のように情欲におぼれず」、エペソ 5：5「あなたがたがよく見て知っているとおりに、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者——これが偶像礼拝者です。——こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。」、続いて 5：6-7「むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。：7 ですから、彼らの仲間になってはいけません。」、このような行ないのために「彼らの仲間になってはいけない」ということを私たちに警告してくれています。ヨハネ 3：18-20を見ると「御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれている。：19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かつたからである。：20 悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」と書かれています。闇に属する人たちは霊的に死んだ者です。エペソ 2：1に書かれています。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいて、彼らは霊的な死から神に呼び覚まされ起こされる必要があります。キリストの光に照らされて、新しいいのちに目覚めさせなければいけないのです。

(2) 闇から光へ移された者

パウロは続けて 5：8で、しかし「今は、」と言っています。神の恵みにより救われたあなたがたは暗闇から光に移され、光の子どもとなったのです。私たちは主にあって光の子どもなのです。この聖句は 1テサロニケ 5：4-5に書かれています。「しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。：5 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。」と。5：8に「主にあって、光となりました。」というのは、暗闇の中から救われて光であるキリストに属する者になったという意味です。ですから、新しく生まれ変わった者として、光の子どもとして生き始めるのです。「主にあって、」というのは光そのものであるイエス・キリストに結び付くことによってという意味です。キリストを抜きにして、私たちは絶対に暗闇から光に変わることはできません。暗闇のままではむなしく生きなければならないのです。「主にあって」初めて、光の子どもとしての生き方が可能となるのです。「光の子ども」とはだれなのかと言ったとき、それは、罪から解放され、キリストに属する者となったクリスチャンです。

2. 「光の子ども」としてどのように生きて行くのでしょうか？

「光の子ども」として生きて行くためには何が必要なのでしょうか？実践して行くために必要なものは二つあります。

1) 見分けなさい

エペソ 5：10には「そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」とあります。まず、「見分けなさい。」と命じられています。「主に喜ばれることが何であるか」をまず知って、それを見分けることをパウロは命じています。これは神からの命令なのです。では、「見分ける」とはどのような意味でしょうか？テストする、わきまえ知る、吟味する、という意味です。救われた者の生活の基準はただ一つです。主に喜ばれることは何なのかを知ってそれを行なって行くことです。ですから、主に喜ばれるために自分から進んで主に喜ばれる良いことを為して行くのです。ローマ 12：2を見てください。「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」「見分ける」というのは「わきまえ知る」ことです。物事の道理を十分に知る、よく判断して行なうということです。「何が良いこと」なのか、何が「神に受け入れられ」ることか、何が「完全であるのか」、それは聖書が教えてくれます。私たちは聖霊の助けをいただいて正しくそのことを判断します。旧約聖書の中のミカ書 6：8に「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。」と書かれている通りです。また、箴言 11：20にも書かれています。「心の曲がった者は主に忌みきらわれる。しかしまっすぐに道を

歩む者は主に喜ばれる。」と。「まっすぐ」というのは少しも曲がっていないこと、また、どこにも寄り道をしないで目的地に行くこと、その他にも、少しも包み隠さないこと、正直であるという意味があります。同じ節に対比がされています。「心の曲がった者は主に忌みきらわれる。」とありますが、これは心が定まらない人です。明らかに、主に喜ばれない者です。その対比によって分かるように、主に喜ばれることが何であるかということをよく判断してそれを行なう者です。

2) 明るみに出さない

光の子どもは何をするのか？「見分けなさい」の次に「明るみに出さない」という命令があります。エペソ5：11を見ましょう。「**実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さない。**」とあります。この「**明るみに出す**」ということばの意味は、辞書を見ると、関係者のすべてや、また、一般的な人に見えるところに出す、また、事実が表に出て来るという意味があります。「**明るみに出さない**」ということばの原語には、「責める、誤りを認めさせる」という意味があります。それに関して、まず、自分について、救われたといっても毎日の生活において私たちは罪を犯します。うそをつくという小さな罪と思えるものでも、それは殺人という大きな罪を犯すことと何ら変わりません。そのことに気づいてその罪を悔い改め正しいことを行なって行く、そのように繰り返して、悔い改めにふさわしい努力を私たちはして行かなければなりません。また、他の人に対しては「**実を結ばない暗やみのわざ**」とありますが、それは「**不品行な者やむさぼる者、汚れた者**」などの偶像礼拝者と行動をともにすることを避けなさい、その誘惑から離れなさいということです。それだけでなく、人の悪を指摘し、罪を憎み、私たちが責める者となることを求められています。もちろん、それには勇気が必要です。

3. 「光の子ども」はどうなるのでしょうか？

今見て来たことは、「光の子ども」とはだれなのか、「光の子ども」は何をするのかです。そして、三つ目は「光の子ども」はどうなるのかということです。エペソ5：9に「**一光の結ぶ実とは、あらゆる善意と正義と真実なことです。一**」、「光の子ども」は実を結ぶ者となるのです。9節の「**光の結ぶ実**」とは神に従うことによって生じる実のことです。その実とは、

- (1) 善意：善良な心、他の人のことを思う心、良いこと、また、慈悲の心を表わし行動するその親切さ、あわれみを意味します。困っている人がいれば助けてあげ、必要があればその人の必要を満たしてあげようとするということです。
- (2) 正義：これは義であり、すなわち、神の目に正しいとされること、正直で心が聖く私欲がなく行ないが正しい様を表わします。その義から逸れないで真っ直ぐに歩むことを教えています。
- (3) 真実：真理を表わします。単に、知識的に正しいことを知っているというだけでなく、まじめで誠実であり信頼に足ることを意味します。

この三つの実を結ぶことは、簡単に言うなら、すべて良く正しく真実なことの結果であると言えます。神の求める「光の子ども」としての生き方を通して、このような者へと私たちは変わって行くのです。コロサイ1：10に「**また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。**」と記されています。

これまで私たちが学んできたことは、「光の子ども」とはだれなのか？「光の子ども」とは闇の中を生きていた者であり、暗闇から光に移された者であるということ。どのようにして「光の子ども」らしく歩むことができるのか？そのためには私たちは「光の子ども」らしく「見分けなさい」、そして、「明るみに出さない」という二つのことを実践する必要がありました。そして、その歩む結果はどのようなものなのか？すべて良く正しく、また、真実なことが「光の結ぶ実」となるということを見ました。パウロが言いたいことをひと言で言うなら、皆さんが一つのからだとなるように、霊的に成長してほしいと願っていることです。なぜなら、それが神が求めていることだからです。私たちは救われて「光の子ども」になりました。罪の支配下にある暗闇から、神の恵みによって、罪深い私たちを選んでくださり、救い出して救いへと招いてくださり、光へと移してくださいました。ですからパウロは、再び過去を振り返って罪に戻ることがないように目を覚ましていなさいと言うのです。光の特徴であるすべての良いこと、正しいこと、また、真実なことという三つの実を結び、神に喜ばれることをしなさいと言うのです。自分の生き方をすべて神にささげ、神に忠実に従って行くのです。神とキリストを知って、神のすばらしさを他の人たちに証することです。それは神に喜ばれることです。これは私たちがしなければいけない生き方です。神が正しい方であると分かっているながら、私たちはすべて良いこと正しいこと、真実なことをつい忘れてしまいがちです。神が求めていることはとても大切なことですから、「光の子ども」としてしっかりと実を結んで行かなければいけません。「光の子ども」として神に喜ばれたいという思いが出て来るはずですが。クリスチャンとして神にふさわしい生き方を皆さんはしておられますか？「光の子ども」らしく成長したいと思いませんか？「光の子ども」として生きたいと決意するかしないか、どちらかを皆さん自身が選択しなければいけません。「光の子ども」らしく成長して生きることを願っています。